

Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

129

森の通信 30周年記念号 2018.6.26

マレーシア・サラワク州先住民プナン人元村長は訴える。「森は生命だ!! 我々はお金がないが森があるから豊かに暮らせてきた。エっ…東京オリンピックにサラワク材! 使用は許せない!!」



吹き矢で狩猟しながら原生林から訴えたL・クロン村元村長ケラセイ・ナーン氏(写真・文/西岡)

CONTENTS

- People(49) アドゥさん……………p3
- サゴヤシと生きる村を訪ねて……………p4~5
- 数字で見るタジジュンティン国立公園周辺の村々……………p6~7
- ボルネオ島の森林再生と火災……………p8~p9
- 泥炭地回復への挑戦とエンタイトルメント……………p10~p11
- 総会より 会計報告……………p12
- ウータン 30周年に際して(JATAN)……………p13
- スンガイプトリの最近の動き……………p14
- ウータンの講師派遣について……………p15
- ウータン 30周年によせて……………p16~p17
- 世界の森林ニュースから……………p18
- 読書案内「牡蠣とトランク」によせて……………p19

【ウータン・森と生活を考える会のウェブサイトを更新しています！<http://hutangroup.org/>】



ウータン・森と生活を考える会は、今年が30周年ということで、これまでに多くの実績・知見の蓄積・つながりを作ってきました。これらを埋もれたままにしておくのはもったいない！ということで、ICTの専門家 Gyro さんのお力を借りて、ウータン・森と生活を考える会のウェブサイトを実在リニューアルしています。これまでの活動のまとめ、いま行なっていること、これからやっていきたいことを、ウータンの理念・ビジョン・ミッションを基に、わかりやすく、かつ専門的に、メッセージ性を込めてたくさんの方へ伝えていきたいと思っています。

「オランウータンの森を再生しよう」と「熱帯林の減少をとめよう」のページではボルネオの現場や日本などでの活動紹介をしており、「森林の問題を学ぼう」では

熱帯林に関わる問題をできるだけわかりやすく伝えています。「世界の仲間とつながろう」のページではこれまで関わってきた国内外の熱帯林保護団体を紹介していく予定です。「データベース」ではこれまでの会報誌がなんと30年分も読めるようになっています！講演会や報告会の報告も充実させていますのでぜひご覧ください。写真や映像のギャラリーもたくさん載せていきます。また、新しく「講師派遣」のページを作成しましたので関心のありそうな方へお伝えいただけると幸いです。難しい用語をわかりやすく解説する「ウータン辞書」、30年間のアーカイブを見える化した「ヒストリー」、情報提供を充実するための「メルマガ」のページも目下企画中です！

みなさまも「こんなページがあれば面白いのでは？」というようなご意見をぜひお寄せください！（石崎）

【ウータン活動記録】

- 3/17 環境市民25周年記念「エコ&エシカルフェスティバル」ブース出展（西岡、石崎）
- 3/21 消費から持続可能な社会をつくる市民ネットワーク「エシカル通信簿発表会」に登壇（石崎）
- 3/23,24,26 FNPF イサム氏講演会「地元NGOに聞く！ボルネオ島の森林再生と火災のリアル“現場話”」
- 4/13 C.O.P ハルディさんを交えてNGOの戦略会議&メディア取材（近藤、石崎）
- 4/14 第10回パーム油学習会「泥炭地回復への挑戦とエンタイトルメント一人々の積極的参加を得るには？」ゲスト：水野広祐京都大学教授
- 4/14 JATAN 主催セミナー C.O.P ハルディさんゲスト「森の人・オランウータンとつながる私たちの暮らし～ボルネオからの報告」での通訳（近藤）
- 5/2 立命館大学産業社会学部現代環境論でゲスト講演（石崎）
- 5/13 エクアドル・インタグ写真展「INTAG：命の森を守り暮らす人々」でゲスト講演（石崎）
- 5/17 大阪産業大学風岡先生と学生がウータン事務所に来所（西岡、石崎）
- 5/21 関西学院大学経済学部でゲスト講演（石崎）
- 5/24 福岡女子大学国際環境経済論でゲスト講演（石崎）
- 5/25 京都産業大学経営学部でゲスト講演（石崎）
- 6/1 Markets For Change、JATAN「足下に熱帯林を踏みつけて～日本の住宅サプライチェーンにおける取り組みをサラワクの熱帯林に与える影響から評価する～」参加（西岡、神前、藤原、近藤、武田、石崎）
- 6/3 「サゴ椰子と生きるスマトラ泥炭地の村の報告とゆっこのカナダ報告」報告（神前、武田）
- 6/6 関西NGOプラットフォーム「関西SDGsキャラバンin兵庫」に参加（加納）
- 6/13 京都府立乙訓高校でのボルネオ研修旅行に向けての事前学習講師（神前）
- 6/14 常磐会学園大学の「国際理解教育論」でのゲストスピーカー（武田）

People (48) タンジュン・ハラパン村人 アドゥさん

ローカルNGO・FNPFで10年以上働いた若手ベテラン(25才)、退職して村で奮闘！



2018年5月、ウータンとの協働で植林した場所に国立公園事務所スタッフとともにモニタリングに行ったアドゥさん（右端）とタンジュン・ハラパン村の青年団メンバーたち（写真・文 missy）

「俺は、自分の村の人たちの”メンタル”を変えたいんだ！目の前しか見えていないとことか、長年NGOの支援を受けても自然に対する意識がほとんど変わっていないとことか・・・でも、今は若い仲間を中心に少しずつ変わってきている」というメッセージを発するアドゥは、25才にしてローカルNGO・FNPFで10年以上働き、森林再生に関わる様々な仕事を任せられ団体のマネージャーにまで推薦されるほどのカリスマ性を持つ。自分の生まれ育った村の周辺でコミュニティを巻き込んでの植林活動、環境教育、海外ゲスト・ボランティアの案内など多様な経験を積んできたアドゥ。NGOスタッフという立場で自分の村に長く接してきたが、「村の人たちの自然に対する意識がなかなか本質的に変わらない」というモヤモヤを抱えていた。2018年初めにFNPFを退職した彼は、「村を変えることに集中したい」という思いから同年代を中心とした若者と集まり、自分のこれまでの経験をゆっくり丁寧に友人たちへと共有し始めた・・・。そして、彼に呼応した仲間たちが出したアイディアは、村で長く活動停止状態にあった「青年団」を再組織・再活性化させるということ。メンバーの多くが仕事を持つ中で走り始めた青年団は、中核を担うメンバーや資金の不足に悩まされながらも、やる気のある精鋭たちが確実に活動を続けている。

ウータンでは、そのような背景を受けて、植林などの活動をこの青年団との協働で実施している。

サゴヤシと生きる村スンガイ・トホールを訪ねて

神前進一

3月初旬に泥炭地保全の先進地視察のために近藤美沙子さんと二人で、スマトラ島東岸リアウ州メランティ諸島県トゥビンティンギ島にあるスンガイ・トホール村を訪問した。まず州都プカンバルの WALHI(インドネシア環境フォーラム/FoE インドネシア)事務所を訪問し、事務局長のリコさんに話を伺った。トホール村は2004年以來 WALHI が継続的に支援を行っており、一昨年は悲願の森林管理権を正式に獲得した。今回の視察では、村出身の若いスタッフのリオさんに同行案内を依頼した。村までは直線距離で200kmほどであるが、船とバスを乗り継いで県庁都市スラットパンジャンに泊まり、2日ばかりで行くことになった。帰りはシンガポールに近いソバタム島まで船、その後飛行機を使い半日ほどでジャカルタに戻ることができた。

トゥビンティンギ島は全体が3mほどの深さの泥炭湿地で、トホール村では住民の手でよく保全された状態にある。トホール村はこの島で最も古く1904年にできたマレー系住民の村である。その後多くの村が分かれて独立したため現在では最大の村ではないが、郡役場が置かれている。255世帯、1,220人(2016年)の村で、面積は95km²、人口密度は1km²あたり12.8人となり、カリマンタン同様に人口密度の低い地域である。統計書によると、サゴヤシ栽培面積が1,050haで、他にゴムとココヤシ、ビンロウジュが栽培されているが、全農地面積の70%以上がサゴヤシで占められサゴヤシの村として有名である。

サゴヤシはニューギニア島やマルク諸島の湿地に自生し、1本の幹に150kg以上の澱粉を含むヤシで、この地域では主食となっている重要な食糧作物である。数百年以上前にスラウェシのブギス人商人によりもたらされて栽培が始まったとされ、この村では8割以上の住民がサゴヤシ栽培に携わり生計を立てている。強酸性の土壌でも塩分濃度の高い土地でもよく育つ、泥炭湿地の環境に適した作物で、アブラヤシやアカシアの植林と違って排水を行わずに栽培できるパルディカルチャー(湿地を損なわずに商業的価値のあるものを生産する取り組み)にうってつけの作物である。しかも単位面積当たりコメの4倍以上の24トンの澱粉が得られ、1日の労働で17日分の食料が得られるという夢のような作物で、政府もFAO(国連食糧農業機関)も食糧危機の救世主として注目している。



サゴヤシはサッカー(吸枝)で周囲に生長する

隣村の船着場まで迎えに来てくれた若者のバイクの背にまたがり、ココヤシ、サゴヤシ、ビンロウジュと家々の並ぶ道を、村のリーダーでホームステイ先のマナンさん宅に向かう。村から外へ車の通る道はなくバイクが唯一の交通手段であるが、道の状態や家の作りからみる限り、ハラパン村より格段に豊かな印象を受ける。マナンさんは50歳前の温和な村づくりリーダーで、彼が組織したEKAという自助組織の揃いのTシャツを着た若者たちと共に私たちを迎えてくれた。

この村には森林土地権の獲得に至るまでの長い闘いの歴史があった。2002年、この村と周辺7か村の10,390haに設定されていた森林伐採権を持つ企業により、住民のサゴヤシやゴム農園が損害を被ったため、激しい抵抗運動が展開され、伐採キャンプや前村長宅に放火、この罪で多くの住民が投獄された。これを機に、村がこの土地の管理権を獲得するための政府との交渉をWALHIが支援することになった。こうしたなか2008年に産業造林企業がこの土地の開発権(HTI)を取得し、住民の反対運動にもかかわらず10kmの大規模排水路を建設した。2011年頃からこの影響で地下水位が低下し、サゴヤシの収量が3割ほど減少することになった。住民は暮らしを守るために水路に木製の堰堤(sekat kanal)を数多く建設し(カナルブロッキング)、泥炭地の地下水位の低下を食い止める保全活動を始めた。住民はWALHIの支援の下、政府にコンセッション取り消しの請願を続ける一方、村を「持続的泥炭地農業のセンター」にする構想を持ち、若い農民を組織し、農



カナルブロッキングを視察するジョコウィ大統領に説明するマナンさんら Green Peaceによる

苗床設置を行ってきた。

そうしたなか、2014年2月にタバコの不始末から火災が発生し、排水され乾燥化した泥炭地に延焼し大規模森林火災となった。就任したばかりのジョコウィ大統領に視察を依頼したところ、大統領は即座に快諾し、同年11月末にトホール村を訪問した。住民による泥炭地管理に感銘した大統領は「アブラヤシのようなモノカルチャーのプランテーションによって熱帯林が失われるのを許してはならない」と発言した。2016年にはBRG(泥炭地回復庁)長官も視察に来村、マナンさんはインドネシア環境賞を受賞、この村が泥炭地保全のモデル事例として全国に知られることになった。同年、政府はHTI(土地の開発権)を取り消し、昨年4月10、390haの土地の管理権が地元7村に正式に与えられることになった。

村に着いた私たちは早速、マナンさんとEKAの若者たちの案内でサゴヤシの栽培現場とカナルブロッキングを見学に出かけた。村の南はずれの大規模水路に面したサゴヤシ栽培地では数人の村人チームで伐り出し作業が行われていた。サゴヤシは一度植えると10年目に初収穫を迎えるが、以後は根元から派生するサッカー(吸枝)が育ち、3年周期で伐採が可能で、住民は年に1か月だけ伐採作業に従事するという。1戸あたり数ヘクタールのサゴヤシ農園を3分して順に伐採するが、それで十分な収入が得られるという。伐採されたサゴヤシの幹は2m弱で玉切りされ、筏に組んで水路に浮かべて製粉工場まで運ばれる。

この村には川や大規模水路沿いに12か所の住民経営の製粉所(*kilang*)があり、幹の皮を剥いで直方体に切り、回転する突起の付いた金属板に当て大鋸屑状にして水で繊維質を流し去り、澱粉を含んだ水を貯留槽に流し込み沈殿した澱粉を取り出す。昔ながらの工程であるが、トホール村のサゴ澱粉は高品質で知られ、国内はもとよりマレーシアにも輸出され村の経済を支える産業となっている。

大規模水路はサゴ丸太の筏を流す輸送手段であると同時に、地下水位維持の重要な役割を担っている。住民は水路に何か所もの堰堤を作り、黒褐色の水流をせき止め地下水位の涵養をはかってきた。昨年、中カリマンタン州プランピサウで見た

*sekat kanal*より堅牢な作りで、メンテナンスもしっかりされていた。地下水位を観測するためのブイが収められた塩ビパイプも各所に設置されていた。住民は昨年から、泥炭地を体験するエコツーリズムを始め、サゴヤシ栽培地の見学やカナルブロッキング、苗床づくりなどを現地体験するプログラムとなっている。

マナンさんの生業はこの村唯一のサゴ麺の製造者である。家に隣接した作業所に数名の近所の女性を雇い、毎日朝から半日余りかけて、サゴ麺とサゴ澱粉の菓子 *sagu telur* の製造を行っている。製粉所から購入した湿サゴの不純物を取り除き、固まりにして茹で、捏ねてシート状に伸ばし、また茹でて陰干しし、それを製麺機にかけて半乾燥のサゴ麺を作る。家族総出で夜遅くまで袋詰めをして翌朝、村内や周辺の村の店に出荷している。毎日400g入り250袋を製造、100万ルピア(約8,000円)の売り上げとなる。マナンさん宅では1日に2食はサゴ麺が主食として、さまざまな調理法で出され、とても美味しくいただいた。

マナンさんは多忙な仕事の合間に、若者たちが自立した生計を立てられるような、新しい有機農業の実践圃場を自らの土地を提供して最近始めた。EKAの10人余りの若者たちは毎日、畑作業に集まり、昼間は水やりや管理作業、夜は遅くまで作業小屋で語り合っていた。筆者も日本での有機農業の経験があることを話し、彼らとの野菜談義に花を咲かせた。初めての収穫はキュウリとササゲが種まき後1ヵ月で、ちょうど私が村を後にする日であった。その後もメールで野菜の生育の写真が送られてきて、日本の種を持って行く約束をしている。若者たちが村に留まり多角的な生計を確立し、泥炭地を保全していく営みが持続・発展していくことを願ってやまない。



大規模水路はサゴ丸太筏の運搬に利用、背後はサゴ栽培地



マナンさん夫妻と

数字で見るタンジュンプティン国立公園周辺の村々

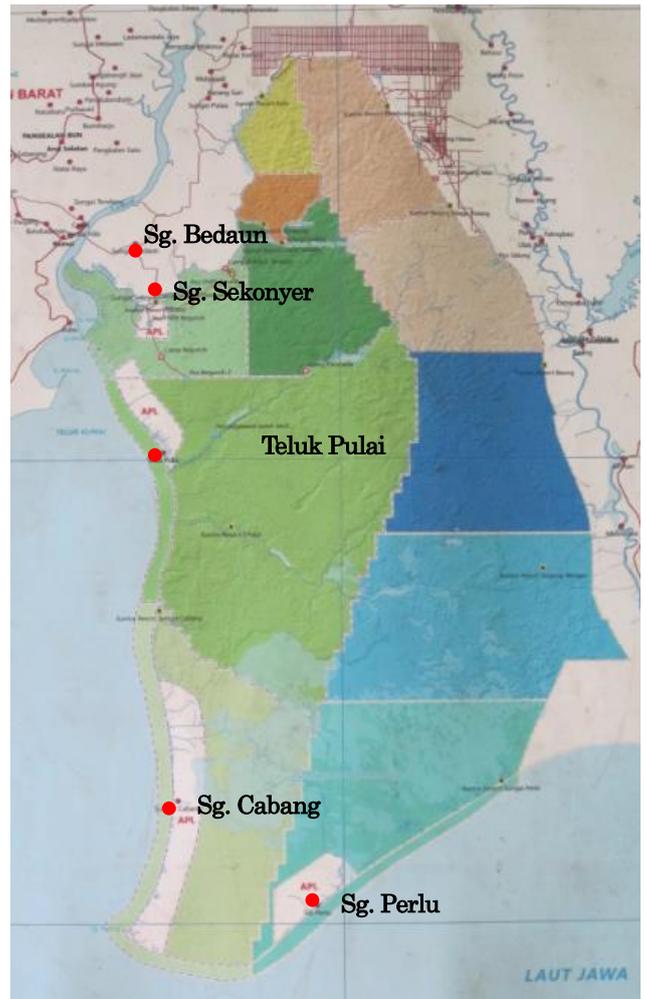
神前進一

ウータン・森と生活を考える会が関わってきたタンジュンプティン国立公園の森林や野生生物の保護には、タンジュンハラパン村(正式名称は Sungai Sekonyer 村)だけでなく、国立公園に隣接する村々の住民との協働が不可欠である。国立公園の地図をよく見ると、APL(Area Penggunaan Lain;その他用途地域)という除外区域3村が海に面した公園外縁部にあるのがずっと気になってきた(まだ足を踏み入れているのだが)。Sg. Sekonyer 村の Padang Sembilan・Beguruh もそうであるが、これらに Sg. Bedaun 村を加えた 4 村の概況を Badan Pusat Statistik(政府統計局)発行の *Kecamatan Kumai dalam Angka* (数字で見るクマイ郡)というネット上で閲覧可能な統計書の 2017 年版を主な資料として、若干の聞き取りやネット上の情報を加えて記してみたい。

ウータンが通う **Sg. Sekonyer 村** は 138 世帯 513 人と周辺の他村と比べ、小規模な村であることがわかる。元来住民は Sekonyer 川左岸(国立公園側)の何か所かに分かれて集落を作っていたが、1990 年代までに公園区域外の現在地に移転した。Sg.Sekonyer には 3 つの隣組(RT)があるが、うち 1 つは Sekonyer 川上流部で近年再び活発化している違法金採取を行うために流入した人々の集落(dusun) Sg. Rasau で、人口は約 100 人に達するという。こうしたこともあり同統計書 2007 年版の 63 世帯 303 人と比べると世帯数は倍増、人口も約 1.7 倍に増えている。

Sg.Bedaun 村 は Sg. Sekonyer から Kumai の街に向かう途中に位置する村で、人口規模、増加率とも群を抜いている。この村は、2007 年以来世帯数、人口とも 3.5 倍以上に激増、1407 世帯 5225 人の村に成長した。この村(des)の中にはジャワ島からの移民(transimigran)地区 Kumai Seberang が含まれ、2008 年から 2010 年の間に 275 世帯が入植した。Kumai Seberang は文字通り Kumai の町の対岸に位置し、Sg. Sekonyer から Kumai への道筋で何度か通った経験があるが、Sg.Bedaun の立派な家やモスクに比べ家が小さく新しい。2013 年以来太陽光発電設備が導入されているが、さらに Sekonyer 川を利用した小規模水力発電を住民が計画している。ASMR 社のアブラヤシ・プランテーションに隣接するこの村では多くの住民が労働者として雇用されるだけでなく、労働力・移住省からアブラヤシ苗木の供給を受け小農として 457ha のアブラヤシを栽培し、中核農園方式(inti-plasma)のプラスマ小農となった農家も多い。

Kumai 郡は全体としても人口の 98%以上がイスラム教徒の地域で、移住者のジャワ人以外は各村ともマレー系住民で構成される。各村にモスクがあるが、Sg.Bedaun には真新しい立派なモスクが 3 か所あるのが目を引く。



村名	世帯数 (2016)	世帯数 (2007)	人口 (2016)	人口 (2007)	2007- 16人口 増加率 (%)	RT(隣 組)数	幼稚園 園児数 ※※	小学校 児童数 ※※	小学校 教員数 ※※	中学校 生徒数 ※※	モスク 数
Sg. Sekonyer	138	63	513	303	69	3	-	39	10	14	1
Sg. Bedaun	1407	365	5225	1493	250	6	173	353	15	146	3
Teluk Pulai	66	72	287	359	-20	3	-	44	8	21	1
Sg. Cabang	246	160	1197	852	40	5	18	173	16	45	2

出典: *Kecamatan Kumai dalam Angka 2017*. (ほかより神前作成。 ※ ※は2015年版(2014年の数字)

小学校(SD)と中学校(SMP)は各村に1校ずつ(小学校は Sg.Cabang には 2)あるが、高校(SMA)はどの村にもなく、高校への進学に際しては Kumai の町に寄宿あるいは下宿を余儀なくされる。幼稚園は Sg.Bedaun と Sg.Cabang にしかない。小学校の児童数は人口に対応して Sg.Sekonyer と Teluk Pulai では全学年で 40 人程度の小規模校であるが 10 人程度の教員が配置されている。中学校の生徒数が Sg.Cabang では 45 人と小学生の 4 分の 1 程度、Sg.Sekonyer でも中学生は 14 人と半分以下であるのは、高校への進学を考えている生徒は中学入学時から Kumai の町の中学校に下宿して通うことが多いことを示している。

国立公園の APL のうち、海に面した 3 村は海路しかアクセスのない僻村で、生業が漁業とココヤシ栽培で、人口の動きも異なる。

村名	水田面積 ha	水稲収 穫面積 ha	陸稲収 穫面積 ha	ゴム収 穫面積 ha	ココヤ シ収穫 面積ha	アブラ ヤシ収 穫面積 ha	コー ヒー収 穫面積 ha	牛飼育 頭数※	漁業従 事世帯 ※	小売店 数
Sg. Sekonyer								57	3	4
Sg. Bedaun					4	457		20	-	6
Teluk Pulai	320	45	22	6.5	55	11		236	52	9
Sg. Cabang	75	25			75		10	652	119	10

出典: Kecamatan Kumai dalam Angka 2017. より神前作成 ※|は2016年版(2015年の数字)

Teluk Pulai 村は海沿いの 3 村のうち最も Kumai の町に近くスピードボートで 30 分程度の距離にある。しかしこの村は Kumai 郡の 4 村のうちで唯一、人口・世帯数とも 2007 年に比べ明らかに減少している。世帯数の減少率 8.3% に対し、人口減少率が 20.1% であることから、世帯の小規模化が見られ、Kumai の町に家族が分かれて住むケースの存在がうかがえる。66 世帯中 52 世帯が漁業に従事するとともに、1 世帯当たり 5ha 近い水田があり、自給性の強い半農半漁の村であることを示している。ココヤシ栽培面積も多く重要な生業となっていると考えられるが、ゴム栽培、そして近年はアブラヤシ小農栽培を始めた農家もあり、1 世帯当たりの牛の飼育頭数も約 4 頭で最も多い。しかし最近の新聞記事によると、2011 年からプランテーション企業 ASMR 社に約 7 割の住民が雇用されるようになり、プランテーションで栽培されるアブラヤシの苗づくりに従事しているという。2015 年 10 月の大規模火災はこの村の周辺農地から最初に出火し、北東方向に延焼し国立公園の森林に大きな被害を与えた。翌年には火入れをしない農業の普及活動が始まった。新聞記事では近年多くの入植者により 178 世帯に増えたことあり、小売店数の多さもうなずける。ASMR 社は CSR としてこの村の海岸部で 2016 年以来 2 万本のマングローブ植林を住民と共に行ったと別の記事は伝えている。この村の南部にある Sungai Buluh Besar はオランウータン観光客が訪れることもあるが、現在 FNPF らにより森林火災跡の泥炭湿地 150ha に 150 万本を植林する大規模生態系回復プロジェクトが進行中である。

Sg.Cabang 村はさらに隔絶性が高いが、246 世帯 1197 人と規模の大きな村である。海沿いに 6km 以上離れた 2 つの集落からなるため小学校は 2 校設置されていて、モスクも 2 か所ある。約半数の世帯が漁業に従事し、沿岸漁業と内水面漁業だけでなくサバヒー (bandeng) という魚の養殖に 18 世帯が携わっている。海岸部にココヤシが多く植えられ、数多くの果樹も栽培されている。ココナツは女性グループがココナツ油の 600ml ボトルを 12000 ルピアで販売している。またこの村では 2005 年以来コーヒーが栽培され 1kg2 万ルピアのジンジャーコーヒーとして売られている。このように多様な生業を組み合わせ、遠隔地ながら生計を成り立たせている村である。タンジュンプティンの南西端は白い砂浜が続くウミガメの産卵地で、国立公園スタッフによりウミガメの卵の保護活動が行われ、こうした地域資源を生かしたエコツーリズム開発が計画されている。

Sg.Perlu 村は国立公園南端の岬を回った浜辺に位置する最も隔絶した漁村である。行政的に Seruyan Hilir 郡に属するため他の村と同様の統計資料は得られないが、28 世帯 109 人 (2016 年) と Kecamatan Seruyan Hilir dalam Angka 2017. にある。しかし 2017 年 4 月の新聞記事によると、残っているのはわずか 7 世帯と過疎化が進み廃村の危機にある。漁業と蝦醬 (terasi) 製造で生計を立ててきたマレー系住民の村でココヤシ栽培とわずかの自給農業も行われてきた。2017 年 3 月に県政府は廃村の危機を救うべく、トランスミグラーつまり国内移住者の受け入れ地とすることを提案、地元もこれを承諾した。漁業と 2000ha のココヤシプランテーションで産業振興と生活条件の改善が計画されている。

以上見てきたように国立公園周辺の村々はそれぞれ問題を抱え大きな転換点にさしかかっているとと言えるだろう。

3/23,24,27 地元NGOに聞く！ボルネオ島の森林再生と火災のリアル現場話

-FNPF (Friends of the National Parks Foundation) ジュルンブン管理者・イサムさん講演-

【違法伐採は森も希望も壊した！ 今、挫けないで、広大な再植林を仲間と作業する！】

(報告・文責/Nishioka)

(大阪集会で講演のイサム氏)



【仕事は違法伐採から植林へ】

こんにちは。初めての海外で最初の報告です。

私は、中カリマンタンのタンジュン・ハラパン村に生まれ、生まれた頃に村では自給自足で米も植えていました。小学校も1つあり、中学校へ行く予定が、父の手伝いで農業をしました。

1997年に大きな洪水があり、米が全滅しました。ちょうど違法伐採の話もあり、私の家でもその仕事をするようになりました。村の大半がその仕事。

タンジュン・プティン国立公園に入って、多くの伐採作業をして、90万ルピア(現レート約7千円)になったことがあります。私にとって90万ルピアと言えば高額であり、違法伐採でそんなにお金が得られるのに驚きました。

この違法伐採の仕事を2000年までしていました。2001年から取締りも始まり、次第にきつくなり、次は砂金の違法採取をしたのです。6ヶ月ですが、キツイ仕事で借金だけが残るものでした。そして石炭開発の仕事もしました。見渡せば、環境が変わっていました。オランウータン・ファンデーションでマネージャーをしたのですが、自由な仕事を求め、2004年からFriends of the National Parks Foundation(FNPF と略)で安い賃金の仕事をし

ています。

カリマンタンの森は、私が生まれた1985年に73.7%でした。それが2000年に57.5%、2005年に50.4%、2010年に44.4%に激減しました。カリマンタン全土で1997-2000年に違法伐採が進んだのです。川の周りに森があっても、中に入ると森がない。そして、2000年からアブラヤシ農園が来ました。

【アブラヤシ農園と火災の拡大】

農園の企業は、水路を掘り、排水し乾燥させた土地にアブラヤシを植える。整地する時に、火を使う人がいるため、火災もあちこちで引き起こされました。元の泥炭湿地なら水が蓄えられるのですが・・・。

2006年は乾季が長く、タンジュン・プティン国立公園でも大きな火災がありました。村でみんなが消火したと思われたブグルでは、火災が消えず植林した木がいっぱい燃えました。水がないから、防火帯を作るために7-8mの間隔に森を切り、拡がるのをとめました。小型消火器ジェットシューターは限界があり、泥炭地の下で火災が蓄えられ、あちこちに火災が拡がり、消すことは困難でした。

2006年は21日間、野営で森に寝ました。水を探す。しかし小川が枯れている。井戸も水がない。寝ていたらカラカラという音がして、また地面から火災です。鋤、鍬も使い、火を消す作業をしましたが、200haの植林地は45分で燃えてしまいました・・・。その前日、鎮火出来たと思い皆が村に戻り、4人しか残っていなかったからです。

タンジュン・プティン国立公園は約36万haですが、2015年にはこの公園の1/4が燃えました。村人、公園事務所職員、FNPFスタッフ、ボランティアも鎮火の努力をしたのですが、あちこちで燃えているから鎮火までは8月から11月初めまでかかりました。タンジュン・プティン国立公園だけでなくカリマンタンの広域、スマトラ、パプアでも燃えてCO2の排出量は、日本の排出量を遥かに上

回るものでした。煙害もひどく、飛行機のフライトもなく、煙を多く吸い50万人が病院に運ばれました。観光客が夏以降全く来れなくなり、莫大な金額の損失だそうです。

【挫けない！再植林を広げている！挑戦です】

私たち FNPF が植えた約 200ha の約 9 割がこの火災で燃えました。大きく育ちだした二次林までも。植林の努力が水泡に消えてしまいました。だけど再度植林をしようと皆 FNPF メンバーは思い、もっと広大に植える取組みを始めています。

植林の今後の課題は、アクセスの悪い所では燃えたために、近からなかなかなか種が飛んでこないことです。だから外部から苗木を多く運んでいます。もう1つは、大きな木が燃えて立枯れしてそのままの有様なので、いつ倒れてくるかもしれず、植林作業が上手く進まないことです。しかし、私たちは挫けません。このような状況のもとでも再植林を続けます。

今年 2018 年の FNPF の再植林計画です。私たちは約 200 万本植える予定です。場所は、スンガイ・ブル・ブサルに 150 万本、アルトゥバルに 2 千本、ナタイ・カプック等に 15 万 5 千本、ジュルンブン 3 万 3 千本、パサラに 2 万本、などです。

こんな大規模な再植林計画は初めてですが、挑戦します。多くの人々の力を借りての計画です。

1 年たった苗ポットに入れた苗木を植えるようにしています。劣化した土地や火災跡地に植えていくのです。野営地で何日も泊まり込んで作業をしています。

私の過去の違法伐採の経験は誤りだったと思います。違法伐採は森も壊し、希望も壊します。その罪を償うために森の再生をし続けます。もとの森に復元し、子孫を含む多くの人たちが希望を持てるようにしたい。FNPF に関わり、素晴らしい経験をしています。ありがとうございました。

【イサムさんへの質疑】

Q:なぜ有機農業もされているのですか？

A: 現在試行中です。ハラパン村では農業をしていなく、野菜を買っています(笑)。農業は本当に誰にでもできる作業です。ハラパン村でアブラヤシに関わる人々が増えています。地域社会で昔のように土地を有効活用して、自給自足を広げたい。農薬を使えばそれだけ費用がかかるし、体に良くないからです。

Q:鎮火活動は身の危険がないですか？

A:仲間も私も絶対火を消したい。再生の森があるので。植林はハードな仕事で、続けてきました。火災で一瞬になります。だから何としても鎮火させたいのです。

Q:植林へのモチベーションは？

A:何度も植林地が火災にあいましたが絶望していません。8 ヶ月も給料がなかった時もありました。再植林させるという気持ちが強いからです。

Q:FNPF の資金は？

A: 詳しく知りませんが、今はドネーション(笑)。アメリカのボーイング社、More Trees、ウータンやボランティアのファンド等です。ボランティアの受入れを外国人中心でして、資金調達にもなっています。

Q:火災は予防が大事と思うが、課題は？

A:以前は防火帯を作るのが1つの主たる行動でしたが、今は火災情報を察知して、初期鎮火がメイン。課題はアクセスです。再植林する所に小道を作る。壊れたドローンを修理して情報の確認をする。インドネシア政府は、2015 年の大火災以降消防車を早期出動させるという変化が起きました。(※Tempo 誌で FNPF カリマンタン管理者のバスキ氏が【火災の中の英雄】に選出された!)

Q:イサムさんはお子さんがいるそうですが、環境教育はありますか？

A:小学校での環境教育は独立したものはありません。現場の実体験は屋外にいっぱいあります。FNPF は今、協力する地元の各学校を始め常に連携しており、大学生が環境教育するプログラムを共同で考え、実践しています。



ジュルンブンでの植林

※この文中の～本、～%などの数字は、聞き取った内容を確認できておらず不正確な場合があります。

4/14 泥炭地回復への挑戦とエンタイトルメント—人々の積極的参加を得るには？

水野広祐(京都大学東南アジア地域研究所・総合地球環境学研究所教授)氏の講演より

(報告・文責/Nishioka)

【炭素貯蔵庫としての熱帯泥炭地の消失】

東南アジアには泥炭湿地が約 2500 万 ha あるが、インドネシアが最大で 1400-1500 万 ha。しかし、その泥炭湿地がアブラヤシ、アカシアなどパルプ材の開発等や火災により次々と消失している。

熱帯の泥炭地は、腐食していない木が泥炭化して、場所によって地層 10m 以上の極めて深い所もある。ここは水と有機物の塊で、95% が水。土はほとんどない。それが泥炭湿地である。最低 300 年以上かかって出来たもので、水が浸っているから、カーボン(炭素)も蓄えられていた。

泥炭湿地はボルネオ、スマトラ、パプア等に広大に広がっていたが、この 30 年で大きく変わった。アブラヤシ農園、アカシアの植林地の拡大である。

【アブラヤシ、アカシアは泥炭地を好まない】

アブラヤシ、アカシアは乾燥地が好きである。スマトラ島の 1 角にリアウ州があり、ここの 900 万 ha のうち 46% が泥炭だ。植えるには、排水しなければならぬ。排水により、泥炭地の劣化が起き、水位がさらに下がる。土地が乾燥し、火が点けばあちこち火事になる。国の管理する泥炭林地域で政府は、林業企業に広大な面積の産業用植林地権を与えたため、泥炭地の急速な環境破壊が起きた。

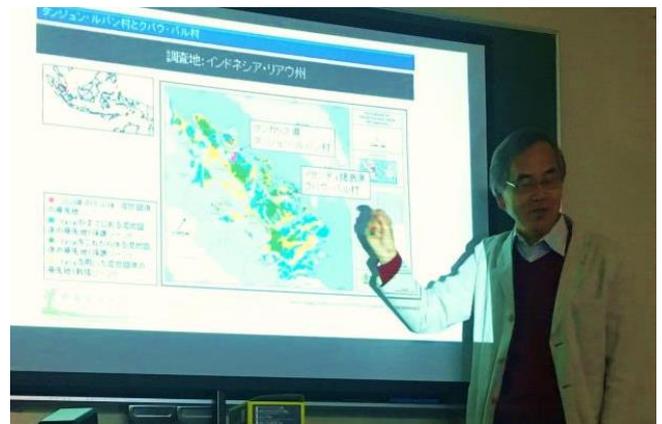
火災と泥炭地の劣化により CO₂ がますます酷く発生して、2015 年は日本の CO₂ 排出量より多くなった。火を点けるから悪いというだけでなく、乾燥させる大地にした政策が悪いのである。

そのため泥炭地回復庁が 2016 年に出来た。地域上・地球上最悪になる温暖化を止めねばならないからだ。このまま泥炭地の開発が進めば、火災は起こり、何度も燃えた所は地盤沈下が加速する。(詳細は Wetlands International の温暖化防止ナイロビ締約国会議へ提出文;スマトラで面積の 5-15% が地盤沈下の恐れと)。

【社会的公正とエンタイトルメントとは】

社会的公正とエンタイトルメントを考えたい。

端的に言えば大規模技術に対して、適正技術が考えられる。資本優先からの不公正に対し、地域の



生態系、歴史、生活等を優先する社会的公正が考えられる。

リアウは 19 世紀に石油が出て(ロイヤル・ダッチシェル)、1930 年頃から多くの人々が住みだした。それまでは焼畑、ビンロウジュ、漁業等であった。ムラユ人(マレー系の人々)が移住し始め、1950 年以降変わり始めた。ジャワ人の移民が来て、泥炭地開発の拡大が始まる。ムラユ-ジャワ人のカップルも出てくる。しかし、1995 年以降はもっと変化が起きた。アカシア造林が次々と出来た。ムラユ人も違法伐採、土地の分割を始めた。アカシアは 7 年で大きくなり、伐採しパルプにする。APP 社、APRIL 社が有名だ。この造成等で水位がどんどん下がり、火災が起きやすくなっている。ジャワ人がアブラヤシを栽培し、マレーシア企業が来てますます拡大した。水路を切り開き、皆がアブラヤシを植えた。

村名 / タンジュン・ラバン村 / クバウ・バル村
開村等 / 1930 年移住増 / 1940 年移住増
民族 / ムラユ、ジャワ / 先住民、ムラユ、華人
生業 / ゴム、アブラヤシ等 / サゴ栽培、漁業等
企業と / アカシア、アブラヤシ / サゴヤシ農園企 の関係 / 企業農園と接する / 業と接する
泥炭地 / 発表者の計画中心 / 県全体が泥炭回 修復 / で、小規模など / 複庁の優先村に

アブラヤシは月に 2 度、年間を通して収穫できる。ゴムは雨季に作業出来ないから、4-5 ヶ月の収入にしかない。アブラヤシは 3ha あればジャカルタの賃労働より収入だけで見ると上回る。そして大型

農業になる。例えばタンジュン・ラパン村の荒廃泥炭地を見ると、21800haのうちアブラヤシが929ha(4%)、未成熟地が3865ha(18%)、アカシア造林が4841ha(22%)、4093ha(19%)の裸地も拡がり、60%弱の土地が火災に弱く、アブラヤシも育ち難い土地になっている。

タンジュン・ラパン村での家計収入の内訳は、ゴムが29%、アブラヤシ10%、他の農業2%、公務員労働21%、企業会社員10%、漁業と建設業各6%、農業賃労働5%等となり、多様な収入源があれば、外部からの支援無しに家計を支える事が出来る。

【再湿潤化と持続的なパルディカルチュアを】

百年前には大木があった。しかし、今は多くの圃場は泥炭地の火災が起き、その後火災が起き易く、放棄地になっている所が多い。それで、私達は泥炭地の湿地化を提案している。

荒廃地になった所に木を植え、水位を回復する住民のイニシアチブを検討する。放棄泥炭地で補助金を使わない持続的なパルディカルチュアを提案している。

1)泥炭火災予防のための荒廃泥炭地への簡易ダムの設置、2)在来種の植林と成長調査、3)木材・非木材産物に関するマーケット調査である。簡易ダムの設置は有効で、1ヶ月強で地下水位と土壤の含水量が増える。激しい降雨が月2回あれば、地下水位は約10cm-80cm上がる。

泥炭は土がスカスカである。木を植え、ダム化させ、地表の湿度を上げないといけない。つまり、泥炭地での農業・林業・漁業を進める。在来種による植林だ。泥炭地回復庁が今、すすめつつある。そしてWWF, Wetlands, WALHI(FoE Indonesia)や他のNGOsも関わり出している。

泥炭湿地回復は、1)再湿潤化、2)再緑地化、3)再植林、4)生計の回復という4Rだ。

ビンタンゴール、ジュルトンなどの木を植え、パルディカルチュアが住民へのプロジェクトとなるよう、住民管理可能な土地—つまり比較的湿潤な状況の土地に戻していく。その後湿潤化を更にすすめ、政府指定の森林地域の泥炭地域において、住民の慣習的土地権を強化するための社会林業の実施を提案している。企業も協力は必要である。

今、国の土地は大変荒廃している。1960年の土地基本法は土地所有権が慣習法に基づくと規定されている。しかし現在、勝手な土地利用が起き、土地紛争が起きていることも要因である。この土地問題

で乾季に火災の勃発があり、政府指定の森林地域への厳しい火入れ禁止が必須である。そのためにも、社会林業を提案している。



*地域パルディカルチュアの例 *2015年の大火災も
サゴヤシから澱粉を製造 あり、火入れ禁止看板

手法は、サゴヤシをビンタンゴールなど自然林が残る地に8m間隔で、1haに120本を植え、土地区分を明確化させる。施肥、管理は粗法的栽培、植栽後は下草刈り・無肥料。土地に自らの権利が確定した場合は、彼らの意識も上がる。サゴヤシ収穫は9-10年後、1mの丸太から伐り出し、華人のデンプン工場へ運ぶ。天然更新を中心に、枯れ株があれば取り除き、親株の周りの吸枝を植栽する。ムラユ、先住民が対象であり、お金の前貸し・資金難が問題になっている。

このようにサゴヤシは泥炭湿地での生業となり、泥炭地を破壊させないで生計を営める方法の1つである。地域に根ざすパルディカルチュアの例として、①農家はサゴヤシを植え、デンプンを取る。②サゴ片を簡易な粉砕器にかける。③華人等のサゴ工場へ運び、そこでサゴヤシから湿デンプンの製造。④国際市場へ。一方で地域製造の拡充を目指す。

【発展の方向とは・・・】

- 1)国際市場に基づく分業により、大規模技術はインドネシアの環境を破壊している。荒廃した泥炭湿地内の回復と再湿潤化・再緑化・再植林を目指す。
- 2)適正技術で泥炭地の回復に取り組む人々の権利を強くする。
- 3)地域の人々の創意を活かし、人々がやる気を出す方向を。
- 4)農村の経済発展を目指し、農村に人々がたくさんいて、農村の潜在力が発展する方向の積極的な評価をし、インドネシアの今後の発展に生かす。
- 5)日本との関係を考え世界との関係を見直す。

2017年度(2017年1月1日～12月31日) 決算報告

(単位:円)

項目	金額	備考
(1)収入		
一般繰越金	3,223,860	インドネシア消防支援金713,755円含む
会費	358,000	
寄付	347,636	イベント時カンパ173,436円含む
インドネシア消防支援金(2017年分)	9,000	
講演等業務委託収益	33,230	
集会収益	51,000	講演会参加費
「熱帯泥炭地保全・再生及び啓発」事業	1,558,000	地球環境基金からの助成
「森林火災後の再植林」事業	500,000	イオン環境財団からの助成
「火災に強い森作り」と「消防体制の共同構築」モデルづくり事業	1,800,000	公益信託地球環境日本基金からの助成
(1)収入計	7,880,726	
(2)支出		
委託報酬	944,500	事務作業等の業務委託
コーディネート料(海外での調査・視察等)	61,620	一部に旅費交通費含む
諸謝金	104,600	
植林活動費	252,300	
消防活動費	720,255	
旅費交通費(国内)	349,660	
旅費交通費(海外)	943,568	
賃借料	144,000	事務所家賃
会場賃借料	53,720	講演会等の会場使用料
諸会費	27,500	
図書費	8,880	
啓発グッズ仕入	5,568	国産ポテチ購入
会報誌制作費	116,100	
郵送費	88,328	
通信費	8,818	
印刷費	27,706	インク・用紙購入費含む
消耗品費	163,313	パソコン・USB購入費含む
支払手数料	5,308	
雑費	2,216	
(2)支出計	4,027,960	
(3)繰越金	3,852,766	・イオン環境財団からの前年受金残金5,160円 ・地球環境日本基金からの前年受金残金1,525,012円 ・一般繰越金2,322,594円

2018年1～3月 決算報告

(単位:円)

項目	金額	備考
(1)収入		
一般繰越金	2,322,594	
会費	112,000	
寄付	86,100	イベント時カンパ29,400円含む
インドネシア消防支援金	50,000	
講演等業務委託収益	20,000	
「熱帯泥炭地保全・再生及び啓発」事業	803,000	地球環境基金からの助成
「熱帯泥炭地保全・再生及び啓発」事業	1,939,000	地球環境基金からの助成(未収入金)
「森林火災後の再植林」事業	5,160	イオン環境財団からの助成(前年受金)
「火災に強い森作り」と「消防体制の共同構築」モデルづくり事業	1,525,012	公益信託地球環境日本基金からの助成(前年受金)
(1)収入計	6,862,866	
(2)支出		
委託報酬	896,000	事務作業等の業務委託
コーディネート料(海外での調査・視察等)	104,276	一部に旅費交通費含む
諸謝金	220,000	
植林活動費	583,070	
消防活動費	424,400	
映像制作費	610,000	
旅費交通費(国内)	479,681	
旅費交通費(海外)	506,917	
賃借料	144,000	事務所家賃
会場賃借料	18,180	講演会等の会場使用料
諸会費	15,000	
図書費	21,264	
啓発グッズ仕入	5,605	国産ポテチ購入
会報誌制作費	41,040	
郵送費	5,670	
通信費	9,473	
印刷費	47,257	インク・用紙購入費含む
消耗品費	51,014	パソコン・USB購入費含む
支払手数料	5,724	
雑費	300	
(2)支出計	4,188,871	
(3)繰越金	2,673,995	

「ウータン・森と生活を考える会」発足 30 周年に際して

熱帯林行動ネットワーク(JATAN) 事務局 原田 公

「ウータン・森と生活を考える会」団体発足 30 周年、おめでとうございます。

HUTAN と JATAN はともに 1987 年にスタートしたので、JATAN も 30 歳を迎えたこととなります。

HUTAN は創設者の西岡さんが依然、日本の熱帯林系 NGO の《生きる伝説》として旺盛な活動をつづけられている一方で、若い第二世代の方たちへの新陳代謝を確実に進められ、新しい組織に生まれ変わろうとしています。熱帯林問題への関心の裾野を広げるスタディツアーの組織と運営は、フェイスブックなどの SNS ツールを効果的に駆使することで若い人たちのあいだからも高く評価されているのだと思います。一般の消費者の啓発的な活動は、じつは日本の NGO にとってもっとも重点的に取り組まなければならない役割のひとつです。

JATAN はマレーシア・サラワク州の問題から発足したキャンペーン団体です。1990 年に「サラワク・キャンペーン委員会」が JATAN から分派する形で、このサラワク問題を専門的に継承されていき、JATAN はどちらかというインドネシアの熱帯林や豪州など木材チップの供給先の問題をおもに扱うようになりました。

しかし、2012 年あたりからサラワクの問題にも再び着手するようになります。そのとき、西岡さんをはじめとする、ずっとこの問題を追いつづけてこられた古参級の方たちから現場や受入れ企業などのたいへん貴重な情報を共有していただきました。

HUTAN の今後の活躍を祈っています。そして、東西にわたる草の根 NGO としてこれからも頑張りますよう。

★★★★ ★★★★★ ★★★★★ ★★★★★ ★★★★★ ★★★★★ ★★★★★ ★★★★★

*1982 年からサラワク先住民は、サラワク州政府へ「森林破壊をやめて!!」と何度も申し入れたが、応えなかった。それで彼らは自らの生活を守るために止むなく、1987 年から約 100 箇所にも及ぶ森林伐採道路の封鎖を行った。多くの先住民たちは立ち上がり、7 ヶ月以上にわたる実施だった。当時、電話料金が

高くインターネットがなく、彼らや彼らと行動を共にするメンバーが世界へ赴いてその情報を伝え、欧米や日本の団体のメンバーが現地を訪問した。

*日本でも初めて「熱帯林保護と先住民の暮らしの保全を求める」ための署名活動が兄貴分の JATAN から 1987 年に始まる。私たちは、1988 年よりこの用紙を元に「熱帯雨林の伐採をストップさせよう!」との日本語を貼り付けて署名活動をした。しかし当時の商社、木材企業は JATAN、ウータン等の申入れの声を聞かず、JATAN や私たちは自治体へ熱帯木材使用削減を要請しようと、諦めずに行動し始めた。(文責・西岡)



サラワク先住民と熱帯林保護へ 1 枚の保存版から

スンガイプトリで続く違法伐採とオランウータン

神前進一

ウータンがタンジュンプティンに加えて泥炭地林保護の活動を計画している西カリマンタン州クタパン県のスンガイプトリ地区について、昨年9月の訪問以降の動きを中心に新聞報道やメールの情報をもとにまとめてみた。

スンガイプトリ地区は海岸近くに位置する57000haの泥炭湿地林であるが、そのうち48440haにPT. Mohairson Pawan Khatulistiwa社(以下MPK社と表記)の森林伐採権が2008年から45年間設定されている。この地区の用途区分は伐採やプランテーション開発が認められる生産林および転換生産林で、保護林は全く存在しない。2013年以降、MPK社は中国投資家からの資金支援を得て、60kmに及ぶ排水路建設を計画し工事を始めた。2016年10月に泥炭地保護の大統領令に違反して排水路が建設されていることが地元住民からの通報で知られ、2017年3月に森林・環境省は現地を視察しMPK社に活動停止と水路の封鎖を命じた。



泥炭地内に掘られ排水路と伐採キャンプ(2018年4月)
foresthints.news サイトより



違法伐採キャンプが6か所以上存在
Greenpeace による

2017年11~12月に地元NGOのYIARIとBKSDAの共同チームがMPK社の許可を得て、コンセッション内でオランウータン、植生、泥炭の状況について緊急調査を行った。その報告書が今年3月に完成、6月5日にGreenpeaceがこのレポートについてプレスリリースを行い、AP電を通じ世界の主要紙が報道し広く知られることになった。それによるとオランウータンの巢の数を3か所でのトランセクト調査からスンガイプトリ地区全体で813から1204頭と推定、保護区域外の生息数として世界最大であると確認された。この調査中に違法伐採が日没後日の出までの間に盛んに行われ、少なくとも6か所の写真のような伐採キャンプ兼製材置き場が存在し、昼間にトラックで運び出されていることが確認された。泥炭地の深さ

の調査からコンセッションの84%以上が泥炭地生態系保護機能地域に分類されるべきで、泥炭地とオランウータン、周辺地域住民の農地を守るために、保護区域に指定しプランテーション開発を中止させることが緊急に必要なとしている。しかし州知事や県知事は誘致した中国系合板工場での雇用を守るために開発の継続を主張しており、森林・環境省との対立が続いていて予断を許さない状況にある。

今年4月6日付の森林・環境省の準公式サイトforesthints.newsで現地視察時の多数の写真が公開された。これによるとMPK社はコンセッション内に現地作業事務所の建設工事を進めており、作業計画書によれば、伐採・排水されたコンセッション内の泥炭湿地林は、ほどなくジャボンという早生樹のプランテーションに転換されるだろうとしている。

スンガイプトリ地区南端に事務所を構えるIAR(International Animals Rescue)はオランウータンの保護・リハビリだけでなく、生息地の生態系を守るには地域住民が中心になって動く必要があると考え、昨年私たちを案内してくれたエマさんをコミュニティー・オーガナイザーとして迎え、住民への意識啓発や働きかけを強化してきた。彼女からのメールや地元紙の報道によれば、今年1月10日に住民、政府、民間部門、NGOから70名以上が参加し、住民参加型地図作りと土地利用計画策定に向けた公の協議が行われた。これはIARと熱帯林保護NGOのTropenbos Indonesiaが共同して開いたもので、スンガイプトリ村のアスパウィ村長も出席していた。IARは森林を保護林と利用林に区分する提案を行ったが、村長はこれを拒否し、IARにアブラヤシ企業を連れてくることを求めたという。村長のこの姿勢は昨年訪問時の話しぶりからも想像できた。これを受けてIARはスンガイプトリ地区8村のうち別の村でのコミュニティー開発を支援することを決定し、タンジュン・バイク・ブディ村とウラック・メダン村の住民による地図作り・土地利用計画策定とそれに基づく村づくりをTropenbosとともに支援しつつあるという。私たちは9月初旬に再訪し、エマさんとクタパンに事務所を構えるTropenbosを訪問し、今後ウータンとしてどのような協力や支援ができるかを話し合う予定である。

ウータンでは講師派遣を行っています！

石崎 雄一郎

ウータン・森と生活を考える会では、「私たちの暮らしと森林減少とのつながりについて理解を広め、消費など様々な行為を見直すよう提案します」というミッションの元で、メンバーが学校やNPOや国際協力機関などで講演やワークショップなどの講師を派遣しています。これまで、JICA 関西、天王寺動物園、京エコロジーセンターなどの公的機関や龍谷大学、立命館大学、常盤会学園大学などの大学、大阪市立聖賢小学校、箕面こどもの森学園小・中学校、大阪府立泉北高校、YMCA 学院高等学校などの学校、シニア自然大学校、関西 NGO 協議会などの NPO/NGO での講演・ワークショップを行ってきました。

豊かな生物多様性が広がるボルネオ島では、かつて島の大半を覆っていた熱帯林が人為的な影響により、どんどん破壊されています。その原因を調べると、インスタント麺、マーガリン、アイスクリーム、トイレトペーパー、コピー用紙など私たちの身近にある商品に辿りつきます。講演やワークショップでは、遠い国の環境破壊や人権問題と私たちの消費生活との関係を学び、問題に立ち向かう国内外の NGO の活動紹介をするとともに、消費者として私たちに何ができるかを考えるきっかけをもってもらうことをねらいとしています。

熱帯林を守る活動をしてきて痛感することは、私たちと身近につながるテーマであるにも関わらず、問題がいかに関わっていないかということ、そしてまだまだ熱帯林を共に守る活動を続ける仲間が足りないということです。“啓発活動”がいかに関わっていないかを痛感させられます。一方で、講演やワークショップを行うと「問題を知り、私も何かしたいと思った」というような素直な意見や「将来環境を守る仕事がしたい」など希望を抱かせてくれるストレートな反応もあつたりします。

以下は、大学生の感想の一部です。

- ・日本とは遠く離れた土地で、どのような問題が起こっているのかを知り、それが私たちの生活、環境にどのような影響を及ぼしているのか深く考えることができました。今回の講義に関連する書籍などを読み、私たちができることはなにか考えたいです。
- ・今まで漠然と考えていた環境問題に対して、主体的に行動しなければ何も変えられないということを知りました。これからの生活の中で、具体的にまずはパーム油を使ったものの使用を控えるなど、自分にできることから環境問題に対して貢献しようと思います。
- ・ボルネオ島を例に、生物多様性についてや熱帯雨林の減少がいかに関わっているのかを知りました。ふだん不自由なく消費生活をしている日本とは裏腹に、環境問題、貧困問題、人権問題が海外で起こっていることになんとも言えない感情になり、発展途上国と先進国とがお互い不利な状況にならないような関係を作っていかなければならないと感じました。

講演やワークショップをやっていると感じることは、講師として行っているものの、こちらが教わることがたくさんあることです。ワークショップで出される意見や感想文では新しいアイデアや視点ももらえます。それ以上に、初めて問題を認識したという特に若い人から、なんとかしよう、自然を守ろうというエネルギーを感じることがあり、それらは活動の原点を思い出させてくれます。

それを一番感じたのは昨年ゲストスピーカーとして訪れた大阪市立南小学校での授業でした。小学校高学年の子どもたちが持つ自然や生き物に対する好奇心、開発や森林火災の被害にあった動物たちへの想像力、インドネシアに住む人々への共感には実に豊かであると同時に、「パーム油がなくなるのもいやだし、動物たちが住む場所がなくなるのもいやだから、なにかちがう方法がないか考えたいと思った」というような問題を把握して解決を図る姿勢には学ぶべきものがありました。

南小学校は心齋橋の中心に位置し、児童の3割ほどが、外国のルーツの親を持つという学校です。「多文化共生」について考える環境に恵まれ、実際にしっかりと学ぶ機会があります。通常の試験で測られる学力を超えた「人生において大切な他者への共感力」「主体的な学びの姿勢」「共生力」といった学びが行われていることを感じました。そして、そこで子どもたちが語ってくれた「何とかしたい」という気持ちを新鮮に持ち続ける大切さを改めて実感しました。

☆講師派遣のご依頼は、ウータンのウェブサイトでご案内しています。(http://hutangroup.org/?page_id=718)

ウータン・森と生活を考える会 30 周年によせて

Yucco

私がウータンに関わりだした頃はちょうどエコツアーの立ち上げ時期で、まだサクラビルの雰囲気にもソワソワしている中、「エコツアーのための視察一緒に行く?」というイッシーさんの軽いひとことと「せやせや!行ってきたらええやん!」という西岡さんの勢いによって、あれよあれよという間に現地入りさせていただきました。このスピード感は、誇るべき一つのウータンらしさではないかと思っています。私が企業勤めに忙しい時期も、日本を離れてカナダに居る今もウータンと関わり続けている理由は「ウータンが好きだから」これに尽きます。何故こんなにもキャラの



濃い人々の集まりウータンが居心地良いのか?その答えを、先日カナダの原生林に見つけました。その森にそびえ立つ巨木や一面を覆い尽くす多種多様な低層木、コケの一つひとつはいずれも、隙あらばその存在感を拡大してやろうという生命力に満ち溢れていました。多様で全力的な命と完璧なバランスがそこにはあって、なんとも言えない居心地の良さを創り出していました。ここにウータンが重なって見えます。キャラクター豊かで世代やバックグラウンド、考え方の異なるウータンメンバーが真剣にアイデアを出し合い議論して活動に取り組むウータンは、その多様性と皆さん一人ひとりの真っすぐな思いゆえにこんなにも居心地良いのだと思います。このウータンという豊かな森で、少しずつですが成長する一本の木でありたいと願っています。

藤原 恒夫

私はこのウータングループに入会してまだ 3 年目です。きっかけはエコツアーの参加、そしてパーム油の勉強会でした。当初の活動は、熱帯林火災問題でした。前年の大規模火災を重くみたインドネシア政府は重要課題として対策を講じる方向へ。と思いきや、様々な制約なのか?なかなか重い腰を上げません。我々も前進しようとするも、相次ぐ役所的ハードルに阻まれました。無力感を味わったものです。コアメンバーの少ないボランティアのみの弱小団体。マンパワー不足を感じました!?

しかし、かつてウータン G は、ラミンキャンペーンの様な大きなムーブメントを起こしました。今、その成功体験を振り返ることに、解決のヒントがあるように思います。現在、10 年一昔といわれる中の 30 周年。世の中は相当変わりました。ラミンキャンペーンの頃の通信手段は電話か手紙でした。パソコン通信と呼ばれるネットも始まったばかり。今や IT は隔世の感です。新しいツールを駆使することによって能率効率アップは必須です。新旧メンバーの交代も必要かも知れませんが、しかし、何年経っても変わらないものもあると思います。それは連携協同による問題解決です。小さな組織だけでは大きな仕事は成し難く、他の団体との協力が欠かせません。

現在、若手の石崎事務局長は活動の拡大連携に向けて、進んで幅広い人脈を築いているようです。次の 10 年、大いに期待出来ますね。皆様のご協力も必要ですのでよろしくお願い致します。

井下 祥子

ウータンに出会ったのは、草の根のイベントの一角。ブルドーザーが熱帯林をなぎ倒す映像と、押しの強そうな男性の勧誘。

身の回りの自然が急速に失われた高度成長時代。森を失うサラワク先住民の怒りは我が事のようなものだった。しかも日本が最大の熱帯材消費国。

運動のノウハウもロクに知らずに入会した。

木材輸入商社には相手にされなかった。故 I さんのアドバイスで始めた自治体キャンペーン。結果さえよければ、相手の手柄にしてもらっていいつもりで、提案した。JATAN 始め、熱帯林の団体は連携しやすく、全国展開の運動になった。

恐るべきパワーのN前事務局長。辛口アドバイザーの故I氏やO弁護士。会報編集やTシャツなどのグッズ、コンサートまで手がけた家具職人Nさんなど、多彩なメンバーの集う会は、デコボコしながら続いて来た。鍋を囲んで年末一泊ミーティング。「熱帯林を守れ」デモ。路上パフォーマンスにおひねりをもらった。前事務局長は自身の結婚パーティーで、先住民にやっつけられる伐採業者を演じた。大阪なNGOだった。

公共工事の熱帯材削減、学校のホウキの違法ラミン材、選挙版キャンペーンなど、少人数で成果の出る、ヒット&ランを狙って来た。

会費・寄付で事務費をまかない、現地での活動等全て身銭を切った。私財を傾けるほどの、西岡さんの熱意があればこそ続いた。薄謝で、(それすら辞退して)講演して下さった講師の方々。「苦しいので少しですが」と寄付をいただいた方。多くの方に支えていただいた。

若い仲間も増えた。旧世代とは違う、新たな活動に期待している。



笠原 英俊 (ウータンの30年 西岡さんと僕を通して)

西岡さんと初めて会ったのは、1976~7年頃だったと思う。場所は今の事務所と同じ、サクラビル新館3階だ。彼は当時「自然を守れ!関西市民連合」で活動しており、古沢広祐(國學院大学教授)氏らと数回話し合いを持ったが、僕としては木や草の名前を覚えようという気持ちが強くて、会からは少し足が遠のいていた。1985年ごろ偶然、会に出ると、何と若い美人3人と、あのへチャムクレの西岡が4人だけで会合しているところに出くわし、僕はこんな犯罪的なことをゆるしてなるものかと、次から2~3回わりやり会合に割り込んだりして……西岡さんと親しくなっていた。この時にはもう、森林や熱帯林の話をしていたように思う。

次に西岡さんと出会ったのは1987~8年の高知の窪川の反原発集会である。夜、喜納昌吉の歌にのせてむちゃ踊りする変な男をよく見ると西岡や!!そして2人は意気投合して一晩中踊り回ったということになった。

ウータンとしての活動の最初は、西岡さんにさそわれて、1990年8月に、サラワクのイバン人の村ウマバワンに、樫田さん、永田さんらと旅行したことだ。焼き畑を実際に見学し、棒で土に穴をあけ種を植えた。貴重な鳥やイノシシの肉をごちそうになり、虫の幼虫も食べた。ドブクロはうまくてよく飲んだ。その中から彼らの生活がよく見えてきた。食料は少なく、タンパク質は小魚中心、キズ・ケガの治療がうまくできず、日本からのナンコウが貴重品。小学校は近くにあるが、中学・高校は下宿する必要あり、お金がかかる。先住民の村にもお金の世界が深く入りこんでいた。この旅行は僕が熱帯林問題を考える上での貴重な基本的体験としてやき付いた。

その後ウータンは西岡さんを中心に熱帯林材削減の自治体キャンペーンや、熱帯林違法伐採阻止のキャンペーンを行った。僕も業者との交渉、南港での調査、和歌山県庁との交渉、また篠山での森林演習などに加わった。ラミン材使用反対キャンペーンでは、学校のホウキの柄がラミン材であることがわかり、僕も中心に関わった。学校では業者との交渉がうまく行き、ラミン材を竹に変更ができたが、コーナンなどのホームセンターでは何度電話で話しても、ラミンという名前だけかくし売り続けていて、すぐにはうまくいかず時間がかかった。

現在のウータンは、熱帯での植林、熱帯林火災の予防の支援、エコツアー、パーム油の問題などいろいろな問題に取り組んでいる。また学習会や現地報告会など勉強できる機会も多く、楽しい。そして以前のウータンは西岡さんの個性と力量にたよる傾向があったが、現在では若い多様な人材が育ってきている。5年前から事務局長をしている石崎君、インドネシア語が堪能な近藤さん、まとめるのがうまい武田さん etc……。それに元大学教授の神前先生が加わって、より厚い人脈を広い知識が入ってくるようになり、とてもいい環境がととのいつつある。第二期のウータンが始まりそうな予感がする。

若い人、うまく育ってほしいな~。

遺伝子分析で違法木材の出所を特定する研究

法医学のツールを使って遺伝子分析により、木材の出所をコンセッション単位で特定する手法が開発途上であることが専門誌に掲載された。特にアフリカでの違法材取引の根絶に寄与すると期待される。[Mongabay 3月6日]

炭素クレジット価格は森林をゴム園転換から守れず

東南アジア大陸部では森林をゴム園に転換する動きが加速し、カンボジア、中国、ラオス、ミャンマー、ベトナムで顕著。森林破壊をとどまらせるカーボンクレジット価格は二酸化炭素1トン当たり5～13ドルで、森林をゴム園に転換して得られる30～51ドルにはるかに及ばないとの研究結果が発表された。[Mongabay 3月8日]

FSC 認証の英国木材輸入業者が合法性確認違反

FSC 認証を受けている英国の木材輸入業者がカメルーンからの木材輸入に際し、EU 木材規制で定められた合法性確認を逃れていたことが発覚し罰金刑が課され、FSC の効果に疑問が呈された。[Mongabay 3月19日]

熱帯林のリン欠乏は成長を妨げないとの研究結果

リンはタンパク質合成や細胞分裂に重要な要素であるが、熱帯林土壌では欠乏している。パナマの熱帯林でリンの含有率の異なる土壌の樹木生育を調査した結果、リンの少ない土地の方が成長が速いという驚くべき結果が得られた。[Mongabay 3月20日]

Greenpeace International が FSC から脱退

FSC の創設メンバーである Greenpeace International は会員資格を更新しないことを発表。強固な木材認証は有益な道具であるが、住民の権利保護や森林管理の改善には不十分であるとし、ガバナンスの弱い地域での適用を疑問視する。しかし先進国の Greenpeace は国レベルでの強力な実施を迫り追及していく。[Greenpeace International 3月26日]

択伐も魚類に大きな影響をもたらすとの研究結果

マレーシア・サバ州の河川での魚の種類に関する英国とシンガポール研究者チームが衝撃的結果を論文発表。森林択伐地域はプランテーション開発のための皆伐地域と同程度に魚の種類が約半減すると従来の考え方を覆す結果。またアブラヤシ農園で森林のバッファゾーンを残した場合も残さない場合も魚の種の数と同様との結果も明らかにした。[Mongabay 4月26日]

中国の天然林は植林により脅かされている

プリンストン大学研究者チームは衛星画像解析により中国南西部で2000～2015年に植林により森林面積が32%増加したが、増加の大半は住民が耕地に1種類の木を植え

たため、天然林は6%減少し、単一樹種の植林地に転換たことを明らかにした。[Sciencedaily 5月2日]

新種オランウータンは生存の道が閉ざされている

スマトラ島北部の山地で昨年11月に発見された新種のタヌリ・オランウータンは、生息地の4分の1以上が中国の支援による巨大ダム計画や関連道路建設で大きな影響を受けるとの論文が掲載された。わずか800頭のこの新種は絶滅の危機に直面している。[Mongabay ほま 5月3日]

森林破壊とマラリア拡大を関連付ける新研究

ブラジルアマゾンの7州でのマラリア罹患率と森林破壊パターンを比較した研究で、罹患率が最も高い地域は森林の断片化で面積が0.1～5 km²になった場所であることを明らかにした。これはマラリアを媒介する蚊の生息に適した陰があって水の多い森林の縁辺部が増えるためとしている。[Mongabay 5月15日]

APP 社は森林破壊ゼロの行動をとっていない

インドネシアの巨大パルプ企業 APP 社は、ゼロ森林破壊の方針を公約して5年が経過したが、ほとんど進歩は見られないとの報告書を NGO が発表。地元地域との土地紛争は長期化し、泥炭地回復の進捗も極めて遅いとする。[Mongabay 5月16日]

世界の保護地域の3分の1が劣化との研究結果

世界の保護地域の約3分の1の地域が人間の手による相当の劣化の傷跡を有するとの論文発表。大規模で規制の厳しい地域ほどその程度は低く、2020年に保護地域を17%にする CBD 愛知ターゲットに各国政府が取り組む中、保護地域の有効性を検証する必要性を指摘。[Mongabay 5月17日]

インド政府の森林増加主張に反論する論文相次ぐ

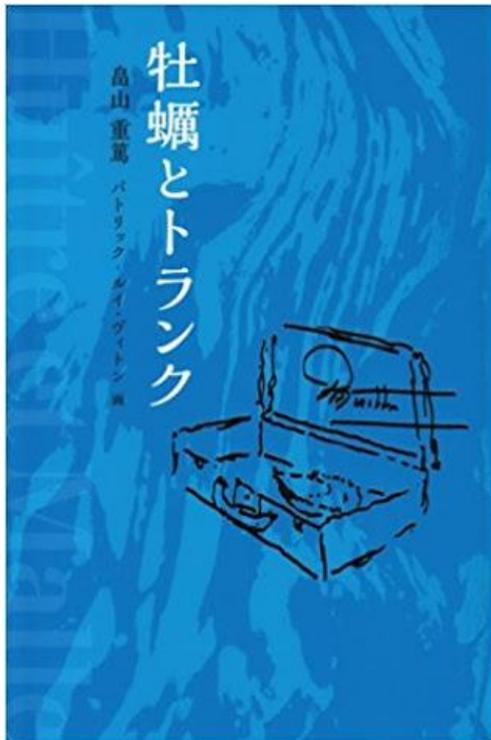
インド政府が発表した最新の森林被覆調査で森林が2年間で0.9%増加したという結果に対し、7か月間で3つの批判論文が発表された。衛星画像と植生の現地調査等を組み合わせた東部や北東部での研究はいずれも森林の減少を明らかにし、天然林でない産業造林地が政府の数字に含まれる可能性を指摘している。[Mongabay 5月23日]

ノルウェーの熱帯林保護資金を会計検査院が批判

ノルウェー会計検査院の報告書は、全世界で展開される REDD+ の主な資金拠出者であるノルウェー国際森林気候イニシアチブ (NICFI) は、その進捗と成果が遅れ、現行の方策は実施可能性と効果が不確実で、不正行為のリスク管理ができていないと厳しく批判。[Mongabay 5月31日]

イノさんの気まぐれ読書案内

井下祥子



『牡蠣とトランク』

畠山 重篤(はたけやましげあつ) 著

パトリック・ルイ・ヴィトン 画

ワック 2015.6

深いが読みやすく、しかも、おしゃれな本。

水彩画の名手 ルイ・ヴィトン氏の美しい絵が数葉。

「森は海の恋人」運動で有名な畠山重篤さんは、森から流れ込む養分が豊かな海を育むことに気付き、上流の人達とともに木を植え続けている。

最近、NHKのドキュメンタリー『牡蠣と長靴』が何度か放映された。

東日本大震災によって気仙沼の牡蠣の養殖が壊滅的な打撃を受けたとき、フランスから次々と支援の申し出があった…。フランスとの絆と、ルイ・ヴィトン創業家五代目当主との出会いを綴る。(内容紹介より)

森から海までをひとつの系としてデザインする。なんという素晴らしい発想！」

ヴィトン(「石頭」の意)と著者、頑固者同士は意気投合する。森があってこそその海の復活だった。

素敵なオチもついている。

会計より

ありがとうございました！

井下祥子

いつもウータンをご支援いただき、ありがとうございます。

年会費は4000円です。よろしくお願いいたします。



<会費・寄付等をいただいた方> (敬称略) (2018. 3. 1 ~ 2018. 6.)

振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書をご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。(メッセージも掲載させていただくこともございます。掲載不可の場合はお書き添えください)

☆口座間の送金を利用されますと、お名前のふいかなのみの通知のみ、住所不明のため、新規の方は会報が届かない場合があります。お手数ですが、振込用紙をご利用ください。

パーム油を使う私たちが日本でできるアクションとは? ~問題解決のために~

講師: 飯沼佐代子さん(地球・人間環境フォーラム GEF)、川上豊幸さん(レインフォレスト・アクション・ネットワーク日本代表)

日時: 7月21日(土) 13:30~16:30

場所: 大阪聖パウロ教会1階会議室

今回は、熱帯林保全に取り組むNGOのネットワーク「プランテーション・ウォッチ」の中心メンバーである飯沼佐代子さんと川上豊幸さんをゲストにお招きし、「プランテーション拡大に対して消費者が実際にできるアクション」をテーマに、熱帯林や泥炭地の保全に向けて日本の市民やNGOがどのように協働し、取り組んでいけるかを考えます。

スケジュール:

①「パーム油問題解決! アクションガイド? -アジアの未来に熱帯林を残せるか-」

ゲスト: 飯沼佐代子さん 地球・人間環境フォーラム (GEF) 関西NGO協議会のあるところが大阪聖パウロ教会

②「パーム油問題解決に向けた金融や企業に対する取り組み状況について」 (関西NGO協議会ホームページより)

ゲスト: 川上豊幸さん レインフォレスト・アクション・ネットワーク日本代表

参加費: 無料

申込み: 右の申し込みフォームよりお申し込みください <https://goo.gl/UXrrtc>

または、contact-hutan@hutangroup.org 090-8145-1146 (石崎)

※この学習会は地球環境基金の助成を受けて実施いたします。





ウータン・森と生活を考える会

[OFFICE] 〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561

<http://hutangroup.org>
【一部】300円 【年会費】4000円
【郵便振替】00930-4-3880

●購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
●ウータン定例会は、 火曜日7:30pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER